2023年5月24日　空調タイムス

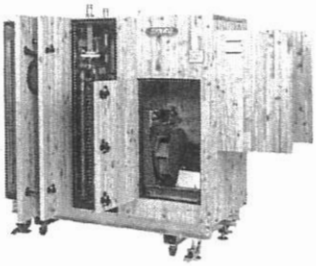
新晃工業

# 業界初　外板に国産間伐材採用

## コンセプトモデル「Green AHU」発表

新晃工業（社長＝末永聡氏、本社・大阪市北区南森町1－4－5）は、カーボンニュートラル（CN）社会の実現に向けた新たな空気調和機（AHU＝エアハンドリングユニット）のコンセプト「Green AHU（グリーン・エーエイチユー）」を策定し、これを具現化したコンセプト・スタディモデルを発表した。

同モデルは、業界で初めて外板に国産間伐材を採用するなど多様な要素を盛り込んでいる。同社では「メーカーの責任として『作る～運ぶ～使う～維持する～再生する』というAHUのライフサイクルを視野に入れたコンセプト・スタディを通して、持続可能な社会に貢献できるAHUのあり方を提案していく」としている。



「Green AHU」の外観

◇

「Green AHU」は、2021年度の新入社員チームが社内研修の課題として提示された『10年後の空調機』というテーマに対して提出したレポートを基にコンセプトモデル化したもの。チームの一員だった大阪支社アウトサイドセールスSINKO AIR DESIGN STUDIOアテンドスタッフの舩田昌美さんは「脱炭素社会の実現に向けた取り組みが進む中で、メーカーとして環境に配慮した製品づくりが必要と考えた。もう一つは、そのころ木造の高層建築物が話題になっていて、木材を使った空調機なら意匠的にも木造の高層ビルに調和するのではと思い、提示させていただいた」と振り返る。

今回の「Green AHU」はコンセプト・スタディモデル。これから商品化に向けて多くのハードルを乗り越える必要がある。取締役兼常務執行役員営業統括本部長の道端徳昭氏は「外板に木材を採用しているのが何よりもまず目を引くところだと思うが、実際に空調機に適用するとなると耐熱性、耐湿性、遮音性、断熱性といった課題があり、それらを一つひとつ検証していかないとリリースできない。今期から課題のクリアに向けて動いていく」と話す。市場投入の時期は未定としながらも「設計事務所様に外観イメージを見ていただいたところ、『環境課題に対する空調機メーカーの答えとしては興味深い』とのご評価をいただき、2025年後半に竣工予定となっている物件にスペックインされた。そのころには空調機として現場でしっかりと稼働していると思う」と実機運用を見通す。Green AHUはSINKO AIR DESIGN STUDIO（大阪府寝屋川市）とSINKO TECHNICAL CENTER（神奈川県秦野市）のショールームに各1台が展示されている。

新晃工業では「AHUは、コンパクト化と省エネ化が重要視されてきたが、Green AHUでは、製品ライフサイクル全体を見据えて設計・生産を行う」とする。『空気をデザインする会社』の新たな挑戦が始まった。